

ブラジル:太陽光発電の本格的導入への期待が高まる¹

新エネルギー・国際協力支援ユニット

新エネルギーグループ

本年7月に開始された国家レベルのリザーブ電源入札（Reserve Energy Auction）に太陽光発電の専用枠が初めて設定され、総数400件の入札（合計発電容量10.8GW）が受理された。開札は10月に予定されており、太陽光産業業界からは総計容量500MWの太陽光発電設備の落札が期待されている。

ブラジルの電源開発は発電プロジェクトを競争入札²で選定することによって進められてきたが、太陽光発電は発電コストが高いため今まで競争入札の対象となっていなかった。太陽光発電は2013年11月に実施された再生可能エネルギー専用のA-3入札³において初めて競争入札の対象となった。しかしながら、落札されたプロジェクトの大半は風力発電で、太陽光発電は一件も落札できなかった。翌月実施されたA-5入札⁴においても同様の結果であった。

今回のリザーブ電源入札には太陽光発電の専用枠が設定されており、太陽光発電の本格的導入が始まると期待されている。しかしながら、落札上限価格は明らかになっておらず、どれくらいの容量が実際に落札できるか不明である。また、入札プロジェクトの電力購入契約は締結されておらず、更に、必要建設資金を計画通り調達できるかどうかという問題点もある。

ブラジル北東部のペルナンブーコ州は国に先駆けて太陽光発電のみを対象とした競争入札を実施し、昨年12月、合計容量 120MWのプロジェクトを選定したと発表した。落札者の内、イタリアのEnel Green Power社（容量96MW）は本年7月、ペルナンブーコ州政府と電力販売契約を締結したが、他の落札者は未だ電力販売契約の締結に至っていない。その原因はファイナンスの見込みが立たないためではないかと見られている。

¹本稿は経済産業省委託事業「国際エネルギー使用合理化等対策事業（海外省エネ等動向調査）」の一環として、日本エネルギー経済研究所がニュースを基にして独自の視点と考察を加えた解説記事です。

² 競争入札は国家電力庁（ANEEL）が管理・主導。入札仕様の設計や入札価格キャップの設定等は入札委員会が決定。入札委員会のメンバーは、鉱山エネルギー省（MME）、国家電力庁（ANEEL）、電力エネルギー商業化室（Chamber for Commercialisation of Electrical Energy, CCEE）、エネルギー研究公社（EPE）。入札は新規電源入札（New Energy Auction）とリザーブ電源入札（Reserve Energy Auction）2種類がある。

³ 新規電源入札はA-3とA-5の二種類に分類される。A-3入札に参加する発電プロジェクトは、入札より3年以内の運転開始が条件付けられている。

⁴ A-5入札は5年以内の運転開始が条件付けられている。

ブラジルの政府系金融機関である国家社会経済開発銀行（National Bank for Economic and Social Development Bank : BNDES）は8月、今回のリザーブ電源入札において落札した太陽光発電プロジェクトに融資すると発表した。利率はプロジェクト資金の15%分に対して1.4-3.9%、15%から65%分に対しては6.4-8.9%で、ブラジルの商業銀行から借りる場合の利子（12-13%）と比べると格段に低い。ただし、国内太陽光発電産業の振興のためローカル・コンテンツ条項が付されている⁵。

ブラジルは太陽光資源に恵まれているが、現在の太陽光発電導入量は約42MWに留まっている。このうち30MWは農村電化プロジェクトによって設置された分散型太陽光発電で、グリッドに連系された太陽光発電は12MWである。しかしながら太陽光発電の本格的導入の阻害要因は少しずつ取り除かれつつあり、今回のリザーブ電源入札は状況を一変させる力を持っていると言える。

お問い合わせ : report@tky.ieej.or.jp

⁵ 現在ブラジルにはシリコン、太陽電池、その他関連機器を生産する企業は存在しない。当面はPVモジュールの組み立てを国内事業者が国産の資材を使用して行うことに留まるが、将来的には太陽電池等についてもローカル・コンテンツ要求が強く求められる。